

音楽ベーシックにおけるズームを用いた 「弾き歌い」授業の実践と考察

生 塩 公光子

はじめに

2020年に始まった新型コロナウイルス感染症パンデミック下でも「ピアノ弾き歌い」の授業を円滑に進めるためオンライン授業を開始することとなった。本来、実技授業は対面が原則であったが、変化せざるを得ない状況下での試行錯誤、そして現在、安定した状態で効果的にオンライン授業を展開できるようになった道のりを考えてみたい。

1 方法・準備

オンライン授業にあたっての準備段階として、通信機器の用意と使用するアプリケーション（以下アプリと表記）の選択、ダウンロードを行う。アプリは常勤の選択により、学校からの附与でZoomというビデオ通話ツールを使用した。その使用に際し、第1回目のオンライン授業の前にZoomアプリを各々のデバイスにダウンロードする様、また授業時にログインが成功するようフォローしなければならない。

通信機器については、発信側はPCとスマートフォンの2台、受信側はスマートフォン1台を用意する。発信側の2台は話す画面と手元の動きを映す画面用で、見る側が理解しやすいよう、見えやすいように配置する。学生はスマートフォン1台で授業を受けるので、手元の状態を示したいときは画面のSwipeを指示する。

授業時間内に同時双方向のコミュニケーションを図るので、両者にピアノ、若しくは電子ピアノのある環境が必要になる。講師はピアノのある自宅から、学生はピアノまたは電子ピアノのある自宅・下宿、または学校の練習室から授

業に参加する。送り手・受け手双方の通信環境も重要になる。今では学校はもとより、個人宅でもWi-Fi環境が整っている場合が多く大変助かったが、個人的に負担が多大な場合は考慮されるべき点があろう。基本的に指導は対一で行われ、学生が予習してきた課題の問題点・解決策等を個別に対応する。また課題曲や指導内容の聴講のため、実際にレッスンを受ける学生以外も同じ画面に入室するケースもある。

2 授業の実践

通常、授業計画では一年間を6つの期間に分け、学生の習熟度に合わせて各期間4～8曲の弾き歌い課題を練習し試験に臨む。課題曲はそれぞれ、季節に合わせた曲と子どもにとって親しみやすい曲で構成されており、ピアノを弾きながら歌をうたうというスキルを身につけることを目標としている。

学習内容は多岐にわたり、読譜に必要な音の高さ・長さの読み取りに始まり、そこから旋律・リズム・和音を楽譜通り再現し、加えてフレーズ感や拍子感、調性感覚等も養う。のみならず、それらを行う「身体」と「脳」のバランス感覚「手指（腕や肩～全身も含む）」の練修、と課題は多い。

学生には、わかりやすく試験に即して1期間を4回の授業でクリアできるよう、簡単な計画を示した。

- 1回目：課題8曲について、実際の演奏を聞かせながら注意点を伝える
- 2回目：楽譜をよみながら指を動かす（必ず自習してくることを前提として）

- 3回目：2回目の内容に加えて、進度によってフレージング（ピアノ）、拍子感にも注目する
- 4回目：曲の表情・声とピアノ音量やフレージングのバランス（歌詞の意味、言葉の切れ目も含めて）にも範囲を広げる
2、3回目の内容の振り返り
そして5回目に試験となる。

1回目の授業では、適切な選曲により示された修得すべき音楽的知識・技能をより明確にして注意喚起し、2回目の授業からは学生個人の水準・自習具合にあわせて指導を行う。

その中で、リモートによってかなり勝手が違ったのは、通信端末から発せられる音のズレである。レッスン当初は発信側も受信側も非常に戸惑った。また、日によってネットワークが不安定な時もあり、聞こえにくかったり、途切れたり、と困ったこともよくあった。

しかしこの状況を回避する為に、ゆっくり間隔をあけて話し、学生とのやり取りにも時間を掛けるという方法をとってみると、待っている時間（沈黙の時間）に受け手の理解が進み、良い効果があると感じた。反面、リズムや拍子の学習にはこの音のズレは非常に難しく、こちらが示したことを模倣してもらい、若しくは一緒に行く、また咄嗟の事象を捉えて指導するにはあまり向いていない。

発音のズレほどではないが、音の強弱・曲の表情を伝えるのにも苦心した。これには学生側の多くが電子ピアノを使用していたという事情も大きく関係しているが（電子ピアノでは機能的に強弱が付きにくい）、指導の際には楽器に合わせた弾き方もあることや、楽譜の読み取りに関してより詳細に気を配るよう注意を促した。

その他、Zoomの「画面の共有」機能を使って楽譜に指使いを書き込んで学生に示すこともできるし（「指使い」の指導は重要度が非常に高い）今回筆者は使用しなかったが、授業を録音・録画して有効に活用することも可能だ。

授業最終回、受け持ちの学生に「オンライン授業の感想」を尋ねたところ、以下のような記

述が寄せられた。

- ・学校に行かなくてよいので時間を気にせずピアノに集中できた
- ・マスクなしで歌いやすかった
- ・みんなの歌を聞くとときに表情がわかりやすくて良かった
- ・1対1で緊張がなく集中できた
- ・リモートではなぜか授業もテストも緊張した
- ・最初Zoomに入れず苦労した
- ・準備に手間や費用がかかった
- ・電波が悪いと聞き取れない、伝わりにくい
- ・リズムが苦手なのに、音にズレが生じて難しかった
- ・テスト中に音が届いているか不安だった（通信状況により）
- ・わかったつもりでも間違っている時があった
- ・コロナで学校の授業を受けられなくてもリモートで学習できて良かった

3 考 察

オンライン授業を始めて、初めの頃こそ少し混乱がみられたが、以後はスムーズに、また思った以上の学習効果をあげてきたのには色々な理由があると思う。

まず、家にいる時間が長く、授業も居ながらにして受けられたこと。心を落ち着け集中して課題に取り組むことのできる環境が与える影響は大きい。（勿論感染症に対する恐怖も感じずにすむ）「一人で集中する」という点に於いては、ある時、他学生への指導もグループで共有するという意味で、皆を授業時間内に画面上に集めて授業を行ったことがあるが、その際聴講中の学生に集中力の途切れや、受講中の学生にソワソワと落ち着かない様子が見て取れたことを思い出す。

次に、コロナ禍で周囲との交流がほとんどなかったことが、学修への自立心に繋がったのではなからうか。勿論その際に必要なのは適切な情報であり、授業の目的・その都度の目標をより分かりやすく示し、学生の面している問題点・課題を個別にきめ細かく指導することである。オンライン授業の取り組みがあつてこそその

効果であろう。「やる気」を喪失した学生は、筆者の受け持ちにはみられなかった。非常に興味深い。

もう一つ、個人のスマートフォンを媒体にして授業を行ったことで「自分の画面の中で自分のみ語りかけられる、自分用にカスタマイズされた授業」としてデジタルネイティブ世代にとって親近感の持てるものになったのではないか、と推察する。

おわりに

この度の体験により、平常通りに授業できない状況下でもオンライン授業により学びの質を向上させられることがわかった。大きな収穫である。しかし勿論万能ではなく、前述したような音楽的技量獲得の難しさや人前での演奏機会がほとんど無いという問題点もある。加えて保育の現場にリモートは利かない。これからはリモートと対面の適宜使い分け、オンライン授業の更なる進化についても興味を持っていきたい。